

## 『学びの身体性』に学ぶ

### －『江戸』の視点による現代教育の相対化－

京都大学大学院 教育学研究科・教授

## 辻本 雅史

皆さんこんにちは。辻本でございます。今ご紹介いただきましたように、私は日本の江戸時代の研究をしております。ですから、この「大学生研究フォーラム」は、その主旨からしてどうもミスマッチではないか、と懸念しております。しかし私からの情報をどう生かすかは、受け取り手の問題だから、と溝上先生に言われてお引き受けした次第です。できるだけ、現代の大学生研究につながるような話に持っていきたいと思っておりますが、それも怪しい限りでございます。

お手元にレジユメのプリントがありますが、おもにパワーポイントで説明していきたいと思っております。

先ほど教育史とご紹介いただきました。教育史とは、歴史学の方法で今の教育を考える学問です。私の場合は、子どものころ好きだった時代劇の影響か、江戸時代を研究しています。江戸時代を通じて、どのように現代の教育に貢献でき、どのような視点が生まれてくるのか、という問いが私の基本的な立場です。

普通、教育史と言いますと、現在までの教育の歴史を時間順に追って、現代の教育はどのように作られてきたのかというのを、系譜的に明らかにする研究というのが普通だと思います。しかし私は、系譜的に現在の教育を説明するというこの行き方をとりません。そうではなく、江戸時代という、今の教育からは「外側」にある、思いきり遠い所に、鏡を置いてみたい。自分の顔や姿は自分では見えないですね。鏡に映して初めて見えてくるわけです。つまり現代の教育を、鏡に映してみよう。その鏡をどこに置くのか、ということです。何で平安時代じゃないの？という人もいるかも知れませんが、平安時代は遠すぎるんですね。映した鏡、そこに映るものは、周りの風景も見えますが、小さすぎて見たいものが見えてこない。江戸時代は、今の教育、近代の原型を作った時代です。したがって、今につながっているところと切れているところと、両方が見えてくる。だから江戸時代の鏡は、ちょうど「程よい距離」だというのが、私の今のところの持論です。この意味で、いわば江戸時代の戦略で、今の教育を考えてみよう、このように思っています。

いきなりですが、私はタイムマシンを持っています。というのは、今、鏡と言いましたが、これを別の言い方で申しますと、タイムマシンに乗って江戸時代の側に行くことなのです。いわば江戸時代人になって、江戸時代の方からこちらを見るわけです。で、江戸時代の側から今を見よう、という戦略なのです。江戸時代を鏡にするというのはそういうことだと思っております。つまり、歴史研究者というのはタイムマシンを持っているんです。例えば今、直江兼続が主人公の大河ドラマをやっていますが、直江兼続が書いた直筆の手紙が残っているわけです。あるいは、織田信長の色々な史料も残っている。それらは、過去つまり向こうから時代を超えてこちらに来ているわけです。研究者は、そういう残っている資料・史料を読み込み、それを解釈し、こちらへ来ているモノに乗かって時代の向こうに行くわけです。行くことができる技法を持っている者が歴史研究者、そう考えていただいて結構かと思っております。私は、江戸時代でもとくに思想史をやっているのです、今日は貝原益軒を取り上

げますが、私は貝原益軒と話ができると思っています。益軒が何を考え、何を主張しているのか、益軒が書いたものはたくさん残ってますから、それを読み込むことによって、益軒と対話ができる。たぶん益軒は教育についてこう考えているはずだ、ということが分かって来るわけですね。とすれば、益軒の目で今を見てみる、そうするとどう見えてくるのか、その見えてきた光景を私は提示してみたいのです。

お手許のレジュメには、欲張っていろいろたくさん書きましたが、実際はこれを全て話すことできません。1として、「江戸時代は生涯学習社会」と書きましたが、これはほとんどお話できません。「はじめに」のところで、「教育を江戸から考える」と書きました。「江戸時代を見る」と言ったときに、何を見るか、これが本当は重要なのですね。それは、今の教育を考えるために江戸時代を見るわけですから。

江戸時代を見た時に、実は「教え」と「学び」の関係が、今とは逆になっているということに注目していきたいのです。「教え」より「学び」を教育の中心にした文化的な伝統があった。これについて、これから話の中で、順に触れていきます。それから今、私は、メディアの視点を重視し「教育のメディア史」というテーマを構想しているので、それも話題にしたいと思ったのですが、時間の制約がありますので、時間があれば、あるいはディスカッションの中で、言及したいと思います。

まず、江戸時代は生涯学習社会であったこと、要するに、色々な学びのチャンネルがあったということを申し上げておきます。ここでは、学校に類するものを主に挙げておきました。寺子屋——私は「手習い塾」ということにしているのですが——、いわゆる寺子屋ですね、それから学問塾、藩校、郷学、あるいはさまざまな芸事を稽古する稽古塾、これがずいぶん多くありました。それからレジュメに書いた「演ずる語り」、これでは何のことかよく分からないでしょうから、少し説明が要りますね。

「学ぶ」、あるいは「教育する」ということは、要するに「知を伝達する」ことなんですね。世代間の知の伝達、これが「教育」だととりあえず置き直してみますと、実は、その伝達する「媒体」、つまり「メディア」が大きな問題になって来ます。分かりやすく言えば、メディアが違えば伝達する「知」が変わって来ます。例えばテレビのバラエティ番組でげらげら笑いながら伝える情報と、学校教育で先生が語って伝える情報とは、違う。どちらも同じ日本語でも、実は違う言語を使っていると考えた方がいいとさえ思われます。つまり学校教育も、知を伝達するための一つのメディアだと、捉えることが出来ます。

こういう風に学校も一つのメディアと考えてみれば、子どもたちの側からすれば、学校だけでなく、それ以外の、知を獲得しているチャンネル(知のメディア)がいろいろ見えてくる。そういう子どもを取り巻く多様なメディアと学校教育とを横に並べて比べると、子どもの知の在り方を多面的に捉えることが出来る、学校と他のメディアを比べる視点が開かれてくること、これが、私はメディアに関心を持つわけです。

例えば石田梅岩などは、知を伝達する、あるいは道徳の教えを伝達するのに、文字ではなくて「語り」でやろうとするんですよ。「演ずる語り」と私は言っていますが、ひたすら言葉で表現することによってこそ、文字の読めない人たちに多くの道徳的な考えを伝えることができる、と考えたのですね。

それからレジュメに「教養本」と書いたのは、貝原益軒が典型ですが、江戸時代には、文字を読める人が非常に増えてきました。その結果、本を読んで勉強するという風景が、江戸時代のはじめからではないですが、100年くらいたった元禄時代には、ほぼ定着しています。これは日本の歴史で初めての現象です。それを可能にしたのは、江戸時代に出版が普及したからなんですね。出版業がビジネスとして、日本の歴史で初めて登場したのは江戸時代に入ってからなのです。

これを私は、「17世紀日本のメディア革命」と見えています。とくに「第一次メディア革命」とこれをとりあえず呼

ぶことにしています。というのは、今、「第二次メディア革命」が進行中だと思うからです。つまり文字と出版をベースに置いた「第一次メディア革命」、その文字と出版を中心としたメディアの状況が、実はいま大きく変わろうとしているのです。つまり「第二次メディア革命」が、文字と出版に頼らない別のメディア——主としてデジタルメディア——に移行している、そういう次の「メディア革命」が進行中で、したがって400年ぶりの「革命」が進行している、と私は思っています。メディアが変われば知の在り方も変わり、知のあり方が変われば教育も必ず大きく変わっていく。教育の在り方が変われば人の関係性も変わってくる。世の中が人の関係性で出来ているとすれば、世の中そのものが、実は急速に違う社会になっている。結局、メディアが変われば世の中が変わる、と私は今確信しているのです。まあ、この話には深入りしませんが、もうひとつだけ申せば、例えば「近代はなぜ生まれたのか」という説明の一つとして、グーテンベルグの印刷術が生まれたことが、近代や近代哲学を生み出した大きなきっかけであったとされています。このことは、メディア史研究者のほぼ共有された認識であるようです。

話を先に続けます。ここで、江戸時代の学びを二つ挙げます。一つは「手習いの学び」です。つまり寺子屋で読み書きを学ぶ、文字の学習ですね。寺子屋は読み書きそろばんを教えていた、だから、寺子屋は「江戸時代の小学校」に当たると思っている人がいますが、それはちょっと違うということ、後で説明します。

二つ目は「学問の学び」。「学問の学び」とは、具体的には儒学の学習のことです。この儒学の学びと文字の学びに共通したものを取り出します。その取り出したものは何か。今日のタイトルにあります「学びの身体性」です。つまり「学ぶ」ということを近代の学校教育との違いに注目すれば、身体を通した学び、いわば「身体を一つのメディア」にした学びが、江戸時代の学びの大きな特徴である、このことを、貝原益軒の資料に基づいて、分かりやすく説明していくつもりです。そしてその上で、身体を通した学び、その学びが結果として、どういう人間形成につながっていったのかを最後に触れたいと思います。いかなる人間形成につながるか、言い換えれば、儒教的な人間とはどのような人間だったのか、ということですね。そして結果として、人間にとって「教養」とは何か、(飛躍があるように聞こえるかも知れませんが)、「教養」とは何かっていう問題を、最後のところで結びにつなげていくつもりであります。つまり大学の「教養論」にうまくつながるといいなと思っています。

まずは「手習いの学び」です。江戸時代は、「文字社会」になっています。ここで「文字社会」というのは、社会のシステムの中に、文字が不可欠に組み込まれている。あるいは文字を使うことを前提にして社会ができています。つまり、文字を知らなきゃ損をする社会になっていると言い換えてもよい、そうした社会のことです。なぜそのような社会になったのか、その説明は省略しますが、江戸時代の社会の作り方が、文字を必然的に知らなきゃ損をするような社会になっていたわけです。庶民でも、とくに町や村の指導者層は、相当レベルの高い文字学習が行われていました。

「町触」を集めた写真を示しておきますが、この「町触」は、京都の町奉行所が出した「お触れ書き」を綴じたものです。京都の町の自治組織の(今で言う自治会のような組織ですが)、町の会所いわば公民館のようなところに保存されていた資料です。今の六法全書みたいなものといえましょうか。何かあれば、何年にどんなお触れ書きが出たか、全て検索して何度も繰り返して見ているわけです。このような触書集は農村にもあります。農村では町触ではなく触書ですが、こうした行政的な触書を常に常備して、法令違反にならないよういつもチェックしていたということが分かります。生活の中に文字がいかに組み込まれていたを示す資料ですね。

これは寺子屋の図、有名な例の渡辺崋山の一掃百態の一部です。学級崩壊しているように見えますけれども、これが寺子屋の普通の風景なのです。寺子屋は、読み書きそろばんを教えると簡単に言いますが、要するに「文字を書くことを学ぶ場」なんです。その文字を書くこととは、手習いです。今の習字だと思ってください。

江戸時代には鉛筆もペンもありません。筆で書くだけです。だいたい数え年の 6、7 歳、今の小学校の一年生くらいの時に、近所の手習い師匠の元に行くわけです。

入門すると、師匠が朝、1 枚の手本を渡してくれます。師匠は書が上手であるということが前提ですが、大きな 1 字や 2 字くらいの師匠の手書きの「手本」を渡してくれます。そうすると、子どもはその手本を傍らに置いて、ひたすら手習いするわけです。師匠は手本を渡したら、あとは昼寝してても大丈夫。まあ昼寝はしないでしょが。つまり子どもたちはただ自習するだけで、みんなバラバラです。一人一人進度が違い、また職業も違いますから、その手本は、子供によって違ってきます。個別学習、自己学習なのです。

師匠は時々巡回して、ここは上手に書けた、でもここはこう、と言って、手を添えて書き直してやるわけです。今の学校教育とどこが違うかといえば、今の学校は漢字を教え文字を教えても、一点一画さえ正しく書けていれば、テストでマルをもらえます。伊藤博文の「博」という字の最後の一点があるかないかで、マルかペケですね。ところが江戸時代ではそうではなく、上手に書けたかどうか、これが大事です。上手にも字を書くワザのことを能書といいますが、能書の技能を学んでいるわけです。

普通、楷書は学びません。草書です。例えばこれ画像は、女手の草書でチラシ書きで、要するに女性用手習い手本です。しかもチラシ書きで和歌を書いているわけですが、こんな見事な手本をまねをする、臨書するわけです。草書体ですから、一点一画なんて問題にならない、いかに流れるように流麗に続くかが問題です。手本の模倣を習熟するまで繰り返しますから、個別学習と自己学習となります。一斉授業になることは決してないのですね。

それから「書札の学び」と書きました。ちょっと聞き慣れないかも知れませんが、寺子屋で文字を学ぶといいましたが、2、3 年で終わる子もいれば 5、6 年は続ける子もいます。また登校は一斉登校ではありません。個別学習ですから来る時間もまちまち。例えば豆腐屋の子は朝ごはんの間に合うように豆腐を作らなきゃいけないですから朝早い。でも、居酒屋の子供は、夜が遅いですから朝も遅くなります。それぞれの家の事情に応じて登校時間はバラバラです。

今の学校教育とは逆ですね。今は学校が決めた時間割があって、8 時半なら 8 時半に登校しなければ授業になりません。一斉授業が前提だからです。一人の教師が 3、40 人の子供相手に、面と向かった対面式の構図で一斉授業で教えていく。教えるカリキュラムもしっかり設計されており、教科書に具体化されて示されています。一方、江戸の寺子屋は一斉授業にはなりませんから、バラバラでいいわけです。この違いは大きいですね。

つまり、子どもの生活の時間に「学び」が組み込まれています。子どもの生活に合わせて「学びの時間」が入っている。今の学校は、学校の都合に合わせて子どもの方が動かなければならない。豆腐屋の子も居酒屋の子も、同じ時間に来なければならぬ。つまり学校に合わせなければならぬ。いまの学校はいわば、いかに教えるか、という「教える側の都合」によって教育が成り立っている。他方、江戸時代は逆に、子どもがいかに学ぶかということで教育が成り立っている。この成り立ちの基本が違うのです。

ここには教育観の違いがあります。どう違うか、これは深入りしないで簡単に言いますが、近代学校では、子どもは「教える」ことによって「学ぶ」ことができる、という考え方です。対して江戸時代は、良い環境を与えれば子どもは自ら学ぶことができる、という考え方です。環境をいかに整備するか。そうすると、江戸時代においては、先生という存在が学ぶ「環境」の一番大事な要素です。

それから「机の並べ方」ということですが、机は、先ほどのあの渡辺崋山の絵にあったように、バラバラです。子どもは自分の机を持ってきています、「天神机」と言うのですが、学問の神、菅原道真の天神にあやかってるわけです、子どもでもひよいと持ち上げられる一番簡単な経机です。めいめいが自分勝手に席を決めま

す。一斉授業じゃありませんから、先生と面と向かって座る必要はありません。どういう要素で決められるか、狭い部屋をいかに有効に活用するか、っていうことでもあります。それ以上に、明かりがありませんから、太陽の明かり、窓側の明かりを追っかけて、午前と午後では逆になったりします。このように机の並べ方も統一的ではありませんでした。

先ほどの「書札」について説明しなければなりません。寺子屋では結構、朝早い子が多い。だいたい午後も続いています。昼で帰る子もいますが、結構長時間、ひたすら手習いするわけですから、単調ですね。だからあんなに無秩序に、子どもたちは遊んだりするわけです。しかもそれが5年も越えるほど長く続ける子どももいます。また寺子屋の休日は今の学校ほど多くはありません。村の寺子屋だと、農繁期に休みが多くなりますが、町中だと普通、年に300日以上は行っているでしょう。長時間、しかも何年も、単調な習字を学び続けるほどのことがあるのだろうか、そう考えますよね。

それは要するに、書札、文字を書く際の書式をおもに学んでいると言えます。例えば手紙の書き方が一番代表的な例でしょう。それにはルールがあって、とても複雑なんです。現代人はそのほとんど失っています。せいぜい「拝啓」、時候の挨拶、用件を書いて、「それではご自愛ください」、「敬具」、その程度ですね。

江戸時代だと、季節のあいさつだけでも最低24通り、それは最低の数です。72に区分する場合もあります。それぞれの季節に応じて書き方や言葉や用語が違います。それから各相手が目上の人か、同輩か、目下かによって用語・用法が違います。男と女でも違います。用件によっても、お祝い、お悔やみ、そんな色々なものの組み合わせで文章が決まっていくわけです。手紙文ひとつ書くのにも、ものすごく複雑。したがって、そういうルール、お約束事、それらが「書札」だと思ってください。極端な話、「三行半」さえ手習っていた所があったようです。もちろんどの寺子屋でもやっていたわけでもないですが、そういう寺子屋があったことが確認されているようです。「三行半」、離縁状をなぜ子どもが手習うのか。子どもだから学ばなくてよいという発想はありません。人生において、遭遇する可能性がある文書の書き方は学んでおく、というのが寺子屋の考え方でした。

こうした複雑多様な書札などを学ぶために、長い期間学ぶ必要があったと言えるでしょう。歴史の専門家でも、この視点を見逃しているようです。

次に「学問の学び」です。江戸時代に単に学問といえば、儒学のことです。知的な、「学問」と名の付いた文章はすべて、漢文で書かれるというのが原則でした。そして漢文のバックグラウンドには、儒学がありました。したがって、漢文を教える先生は、実は、儒学の先生、要するに「儒者」です。

では、儒学とは何かというと、一番簡単に定義すれば、「経書を読むことに徹した学問」ということです。経書とは何か。儒学の、聖人の言葉が書かれているテキストで、すべて紀元前に書かれたとされています。代表的には四書五経ですね。四書五経は、中国古代、紀元前に書かれた古典です。だから中国の古典語で書かれたテキストを読む学問です。7-8歳で学問を始めた子どもが最初に手にするテキストが、『孝経』だったり『大学』だったり『論語』だったりするわけです。

一方、トップレベルの儒者・先生が手にしているテキストも、同じく『大学』だったり『論語』だったりします。小学校の一年生と京大総長とが同じテキストを手にして勉強している、という風景はわれわれには想像しにくいですね。近代学校ではありえないことです。でも、江戸時代にはそれが当たり前。儒学とはそういう学問です。

何が違うのか。まず、子どもは素読をすることから始めます。そして学問に達した儒者は、その解釈をする。古代以来、2000年にわたって、経書の注釈がずーっと書かれてきています。無限にあるかようなその注釈書群を読み解いて、本当に自分の正しいと思う解釈、つまり「真理」を掘り出してくる作業がトップレベルの先生らがなしている仕事です。儒学というのはそういう学問だということですね。

子どもは、聖人の言葉、孔子の言葉が書いてあるテキスト(経書)をまず「素読」するわけです。「素読」というのは、まだ数え年で8歳前後、小学校低学年の子どもがいきなり、『孝経』を渡されます。最初は普通『孝経』、親孝行とは何かという問題を、孔子とその弟子の曾参との二人が対話で議論している、そのテキスト。「身体髪膚之を父母に受く、あえて毀傷せざるは之れ孝の始めなり」という言葉から始まります。子どもには意味はまだ分かりません。でも、それをひたすら機械的に暗誦しなければならない。

次いで、『大学』『中庸』『論語』『孟子』、これが四書です。この四書、漢字の数は総計およそ52800字ほどです。貝原益軒は、これを一日100字ずつ100回、声に出して読み上げ、そして手で100回書きなさい。そうすると、どんなに頭の悪い子でも、100回100回100回やれば覚えられるよ、と言ってます。52800字を100字ずつやるとすれば、およそ528日で四書は終わります。2年かからない。2年くらいで、意味もろくに分からないけれども、『論語』のある一節の頭のところが出てくれば、その後の文が自動的にすらすらと出てくるのです。これが「素読」という学習です。

こんなことを今の学校でやると、親も怒りますよね。でも、素読は良くないからやめなさい、と言った儒者は、江戸時代300年の間、一人もいませんでした。学問を志せば、素読は子ども時代に必ずやらなきゃいけないというのは、決まり事だったのです。

何故なのでしょう。この答えは後で触れますが、一言だけ。私はこれを「テキストの身体化」と呼んでいます。『論語』なら今の文庫本でも結構な量になりますが、このテキスト一冊を丸ごと、身体のうち刻み込むことです。だからこれを「テキストの身体化」というのが一番適切だと私は考えています。他の人はまだ使ってくれていませんが、きっとみんなが使うようになると確信しています。

もう一つ。経書テキストは元々中国古典語です。それを日本人がいかにかに読むのか。日本古代以来、漢文の読み方については色々苦勞してきました。はじめは中国語で読んでいたはずですが。中国語で読まなくなっても、頭からずーっと音読みで棒読みしていました。例えば、仏教のお経は今でも漢文ですよ。仏典は中国で漢訳されたのです。今でも「摩訶般若波羅蜜多心経観自在菩薩・・・」、意味も分からないけど、音読みで棒読みしているでしょ。あれは、リズムはいいのですが、意味が分からない。そこで返り点と送り仮名をつけて訓読するようになりました。訓読というのは、日本語の文法に置き換えて読んでいます。しかし江戸時代の「現代語」で読んでいたわけではありません。いわゆる和語、平安王朝の古典語として読んでいたわけです。ただしいろんな工夫をして暗誦するのにリズムが良く、身体に入りやすい。「身体化」しやすいようなテキストとして、読み方に工夫が随所に凝らされて、訓読されてることは間違いありません。

大体10歳くらいまでにこの素読を終え、次に、講義、会講、独看と段階を追って進みます。「講義」というのは、いま言うレクチャーではありません。現代の大学では一人の先生が大勢の学生たちに一斉授業で話をするのが講義ですね。でも、儒学の「講義」というのは、テキストの意味を言葉で解釈することです。「義、つまりテキストの意味を講ずる」というのが「講義」です。これもマンツーマン、例外はあるにしても原則として、一斉授業にはなりません。主任教授が、全部の学生たちを集め、スタッフ、教員たちも全部集めて、月の定まった日などに、儀式的な意味を込めて、一斉授業風に「講義」をすることはありますが、それ以外は、実はマンツーマンなんですよ。

次に「会講」。「講義」は経書テキストの解釈といいました。いろんな注釈書に基づいて解釈していくわけですが、「会講」というのは、ある程度学力ついた学生たちが、いわばグループ学習をするのです。ゼミのようなものだと考えて大きな間違いはないでしょう。10人前後の、同じくらいの学力の者が集まって、当番を決めて輪番でテキストを読んだり、「講釈」したりするのです。普通、チューター役の人も一人入ります。

「独看」というのは一人で読むのです。一人で読む場合も原則的には音読なんです。ただし音読ではあまり

はかどりませんから、ある段階で「看書」になります。「看書」というのは黙読ですが、実は近代我々が今いう黙読とは、実はちょっと違います。

「看書」というのは、ひとりで、目で読むのですが、どういえばいいんでしょうか、要するに経書など、漢文テキストをぐっと睨んで読んでいくのです。もちろん目でずーっと順に文字を追っていきます、声に出したら時間がかかりますし、返り点や送り仮名で、つまり訓読体、日本語の文法で読んでいってしまいますので、それは避ける。いわばスキャナーで、テキストをずーっと順にスキャンしていく、というのが一番わかりやすい譬えではないか、と私は思っています。目で漢文テキストをスキャンしていく。慣れてくると意味がわかるのです。素読をして、漢文テキストを身体化していることが前提ですが、それができていれば、看書ができるようです。なぜか、それをどう説明すればよいか、というのか簡単ではないですが、本当に可能となるようです。

ある儒者の日記を読んでいますと、一日2時間か3時間くらいで200ページくらい読んでるんですね。返り点送りがなで読んでいたら、それだけ読むのは不可能です。目で漢字をずーっと追って、それで意味がスーッと分かるわけです。荻生徂徠が、看書で読むのがよいと言っています。中国語で読むのが本当は一番よいのだが、日本人にはそれは無理。だから看書だというのです。声に出したら中国語と日本語とは違うから、同じにならない。だけど目で読むならば、中国人も目で読んでるのだから、そこに差が無くなるというのです。漢文をにらむだけで読めるというのは、素読をマスターした人なら、リアリティ持って分かるんだと思います。私は素読はできておりませんから、そう言う資格はないですが。

素読の光景を図で示しておきます。テレビなどで、素読といえ、一人の先生が20～30人くらいの子どもたちを相手に、「子曰く、学んで時に之を習う」と言えば、子どもたちも一斉にそれをオウム返しで復唱する、こうした場面に出会うことがあります。あれは間違いです。この図のように、先生と子どもが一对一です。次の人がすぐ手前で待ち、別室になっている控えの間では、そのあと来た順に、子どもたちが待っているのです。

テキストを挟んで、一对一で差し向かって、先生がテキストの一節を読み、子どもがオウム返しで声に出していきます。一日で数行程度読むだけでしょう。益軒によれば、100字くらいが適切となります。それを2、3度繰り返して、後は家に帰って自分で復習するのです。翌日には待っている間に、昨日習ったところがちゃんとと言えるかどうか、何度も繰り返して復唱している。そして、先生の前に出ると、昨日習ったところを復唱させられます。もし正確に言えなかったら、もういっぺん最初からやり直し。うまく言えたら、ようやく次に進みます。一回の分量は少なく、また指導時間も短時間です。先生はモデルを示して子どもが真似をして覚えます。模倣と習熟、それを繰り返しているのです。

次の図は、「講釈、会読」と書きましたが、講釈と会読は風景だけでは分かりません。明らかにこちらは大人です。まだ前髪の残っている若者もいます。大人たちがグループ作ってますね。このグループの真ん中にいるのは今で言うチューターです。少し学力の上の人で、誰かが音読してそれが間違っている時などにチューターが直していくわけです。ディスカッションして、議論が分かれた時にチューターが、君の方が正しい、いや二人とも間違いでほんとはこう、という形でグループ学習をリードします。

奥の方では、講釈、たぶんテキストの解釈がきちんとできるかどうかを個別にチェックしている。大体そうした風景です。これは明治になってから、江戸時代の学問所の光景を描いた図です。

武士たちは、なぜ中国古代漢文の経書テキストを学ぶのか。これが問題です。四書五経の経書はいわば聖人の言語で、「真理」が語られている言語です。「真理」の言葉を自分の体に刻み込んでいるわけです。聖人の言葉は、日常の言語とは違います。宝石のような言葉で思想の言葉ともいえます。そうした金言を、自分

の体に入れているわけです。

それからもうひとつ、漢文は国際言語です。中国語と日本語と朝鮮語と、声に出しては通じません。でも文字に変換したら、同じテキストをみな学んでいるわけですから、コミュニケーションできるのです。朝鮮から朝鮮通信使という使節団が定期的にやってきました。朝鮮の役人は科挙に合格したトップレベルの学力のある知識人です。日本では会話はできませんから、紙に書いて筆談します。日本の儒者は、先を争って、朝鮮通信使に会談を申し込み、そこで漢詩の応酬を行います。朝鮮使節に褒められたら、一挙に日本で名が知られるようになります。このように漢文は国際言語と言えます。

ちょっと脱線しますが、幕末の欧米の来航、たとえばペリー提督がやってきた時、必ずしも日本語の通訳を連れているわけではありません。時々、漂流民など日本語通訳を雇っている場合もありますが、たいてい中国人を乗せています。意思疎通は筆談です。筆談の方が実は正確な意思疎通ができます。文字に書きますから、声の言語よりも正確だといえます。やはり漢文は国際言語ですね。

それから、学問的なもの、知的なものは、漢文で書かれています。驚くなかれ、オランダ語を勉強する蘭学だって、実はテキストが漢文で書かれていることが多いのです。これは、鎖国のもと、日本に輸入されるヨーロッパの本は漢訳洋書に限られていました。洋書が中国で漢文に翻訳されて、ようやく日本に輸入されているわけです。蘭学を学ぶ人も、漢文をまず習っておかなきゃいけないわけです。もちろん医者も漢文が要ります。漢方医学がたぶん 98 パーセント以上でしょうから、漢文が読めないと、医者としての仕事できません。知的な文章は漢文で書かれていた。だから知的活動をするには漢文での読み書きが自由にできることが必要な条件だったのです。

四書五経の素読を終えた人は、どんな漢文でも自在に読めるようになっていたようです。結論的に言えば、素読は、「知的言語」を獲得するプロセスだった、そのように考えてよいと思います。学問の世界にアクセスするための言語が漢文だったということです。明治維新以後は、これが英語やドイツ語など、アルファベットの言葉に変わったわけです。実際に江戸の知識人が中国や朝鮮に渡って会話するわけではありません。漢文の本が読めて書ければよいのです。

漢文で文章を綴る時、自分が身につけた聖人の言葉、つまり儒学の思想的な意味を含んだ言語で表現している。言い換えれば、自分のものとした言語——「身体化された言語」というのは、すでに自分の言語と化している——を自在に操って自分の文章を書ける、つまり自己表現できる、ということの意味しているのです。

さらに加えて言えば、ものを考える、「思考する」という行為は、実は言語活動といえますよね。私たちが考える時、言葉で考えているでしょう。ですから、心の問題は、実は言語の問題と一体だと、私は考えています。そうすると、江戸時代の素読をした知識人は「漢文でものを考えた」ととらえていいと思うんですよね。つまり漢文は、「知的言語」であるとともに、「思考言語」でもあるといえます。

このように考えていくと、素読をして漢文を学ぶというのは、「学びの身体性」、さらに「素読の身体性」と書きました。つまり、身体のリズムと響きにマッチするような訓読式の漢文があるわけです。これはちょうどヨーロッパにおけるラテン語の役割とそう字形だと思われま。ラテン語はヨーロッパ中世の知的な言語で、古代から中世にかけての文献はたいていラテン語で書かれています。例えばカントとかヘーゲルとか、近代哲学を作り上げた知識人は、ラテン語を自由に読み書きできたようです。その時代に、ラテン語はすでに使われていない、日常生活でラテン語は使われていない。にもかかわらず、ヨーロッパの知的な伝統、つまり古典はラテン語で書かれています。それは国の領域を超えています。カントの学位論文はラテン語で書かれているそうです。ラテン語は国を越えたヨーロッパの国際言語の位置にもありました。そう考えていくと、ちょうど漢文とラテン語とは相似形をしているといえるでしょう。

貝原益軒の書にこういう文章が見つかりました。ちょっと読んでみます。元々漢文で書かれたのを読み下しています。「蓋し初学の知る所、俗学の記す所は、其の皮膚に止まるのみ而已。君子の知る所は皮自りして肉に到り、肉自りして骨に到り、骨自りして髓に到る。其の間に幾重の界限を隔てることを知らず。(中略)苟くも学んで自得すること能はざる者は、即ち是れ口耳の学、訓詁記誦の習のみ而已」。

つまり真実の学者は、皮膚の学びに止まるものではない、いや、肉でもなく、肉より骨、骨でも足りない、骨の内側にある髓に至るまでの、そういう学び方でなければならない、というのです。文字通り身体の内側にひたすらしみこんでいくような、そういう理解の仕方が、この言葉で示されていると思われます。「テキストの身体化」とこの引用とは、ちょうど呼応していると、私には思われました。

この貝原益軒はずいぶん多くの本を著しています。100冊以上著作があります。そのなかでも、とくに晩年に近づけば近づくほど、易しい言葉で書き始めております。漢文で書かなくなった。それは何のためなのか。漢文で書かないですから、学問的な言語ではありません。しかしあえてそれを承知の上で、書きつづけました。

普通の文字の読める人ならば誰でも読むことができるようなテキストを、私は著し、それを出版する、というのです。益軒の時代、それは元禄前後ですが、出版メディアが社会の隅々まで行き渡り始めた時代です。簡単な話、もし出版が一般化していなければ、井原西鶴がこの世に出ることはなかった。浮世草子というのは、通俗小説のようなものです。西鶴の本は、何千部何万部と読まれています。つまりこうした大量出版がなければ、西鶴は出現しなかった。

商業出版、それはこの時代の新しいメディアです。この新しいメディアに、貝原益軒は初めて着目した儒者だと私は思っています。その出版メディアに乗せるための言葉を、彼は紡ぎ出し書き著したわけです。で、書いた端から出版に付しています。しかも、益軒の著作は、儒学に基づき人々の生き方や道德の教えが書かれています。平明な文体で書かれています。それが、江戸時代を通じて途切れることなく出版され続けていった理由でしょう。私の本なら10年もたてば忘れられていきますけど、益軒は200年以上ですね。いえ、今でも岩波文庫に益軒の本が3タイトル入っているのですから、300年後の今でも読まれている、超ロングセラーといつてよいでしょう。

なぜ、益軒の本はそんなに読まれたのでしょうか。分かりやすく言えば、読者が読んで、なるほどな、と思うことが書かれている。誰でも知っている自明なことなら、そんなに読まれはしないでしょう。「なるほどな、そういうことだったのか」、という風に、腑に落ちるような書き方をしている。つまり、江戸時代の普通感覚を上手く学問の言葉に置き換えて説くことに成功しているのです。漢文ではない、独特の平明な文体で置き換えることに成功しているのです。とすれば逆に、私たちは、益軒が書いたものを通じて、江戸時代人は一体どう考えていたのか、おおむね分かってきます。私は益軒にいつも会いに行きたくなるわけはここにあります。

時間の関係で次に急いで、「予めする」という言葉についてです。これは、益軒が書いた教育に関する本『和俗童子訓』のキーワードです。「予めするとはかねてよりといふ意。小児のいまだ悪にうづらざる先に、かねてはやくをしゆると云」。つまり、子どもは生まれたばかりの時は白紙のようなもので、そこに最初に入ってきたもので染められていく、白紙の中に書き込まれた色に染まってしまうと、もう簡単に変わらない。逆に言えば、一度染まってしみ込んだものは、生まれつきと変わらないものとなる。習慣化されて自分の生まれつきと変わらないものになると、ほとんど変えることはできない、そうなる前、悪が入って来る前に、よいものに早く染めていくよう、良い環境を与えなさい。これが「予めする」という言葉の意味です。

例えば鶯の例が引き合いに出されています。10歳前に早く教える事が大事。生まれつきが悪くても、良く教えれば必ず良くなる。仮に生まれつきが良かったとしても、悪くもてなさば、悪い状況になってしまえば必ず悪

に陥ってしまう。例えば、鶯の雛を飼うとき、——鶯を飼うのは、江戸時代の好まれた趣味。鳴き声を楽しむのですね。「うぐひすの雛をかふに、はじめて鳴く時より、別によくさゝづるうぐひすを、其の傍らにおきて、其の音を聞き習わしむれば、」つまり、去年の鶯鳴き声コンクールで一位になった鶯の隣に、生まれたばかりの雛を置いておけば、その雛は上手な鳴き声になっていくと言っている。これは経験的に分かっているのでしょう。鶯でさえそうだから人間は当然のことだ、というのが彼のメッセージです。つまり、早くから子どもによい「環境」を作りましょうということですね。なぜでしょうか。

生まれた子どもは、無意識のうちに自分で、全身を通じて、周りのものを真似て自分のものにしていくと言っています。真似をして自分のものにする、繰り返して行ってそれが習慣化される、習慣化されたものはもう変わらない、そう言っているわけです。

それを儒学思想の言葉で言えば「礼」です。「礼」に基づく教育文化になります。結局、子どもは自分の身体で経験し真似をしながら自分を作っていく、そう考えていけば、結局身体で真似をし、身体に身についたもの、習慣化されたもの、それは自然に身についたものなんですね。そうなると「生まれつき」と変わらない。これは別の言葉で言うと、「しつけ」です。つまり身体をあるべき形にきっちりはめる（「型にはめる」といえば、今では評判が悪いですが）、あるべき姿をきちっと身体に覚えていけば、自然に心も良くなっていくというのです。私はこれを「からだからこころ」へという言葉で表現しています。体でトレーニングして行って、そして気がつけば心が良くなっていくという、そういう発想ですね。

分かりやすい例として、私は茶道の稽古をイメージしたらよいと思っています。お茶は、私は自分で稽古したことはありません。お茶の稽古には詳細な決まり事があります。決まり事は、意味を教えられないまま師匠の指示通りにしなければいけない。私はこの方がよいと思うのですが、とか言って師匠に口答えすると、もうあんた帰らなさい、と言われるんですね。では、師匠の言うとおりに、寸分違わず身体で表現できたらお茶は満点がもらえるかという、必ずしもそうではなく、形を越えたところの精神的な深い世界に達することが期待されている。深い精神世界に入る一つの回路として、身体の規律化、つまり「型の教育」があると考えればよいと思うんですね。

同じことですが、宗教の修行もそうです。比叡山の千日回峰行のことを思い出して下さい。身体の極限まで追い込んでいきますね。あれだけ体を痛めつける目標は何か、それはある種の「悟り」を開くところにある。超越的なもの、宇宙的なものや繋がる場所にあるわけですよ。つまり深い精神世界に入るために身体を追い込んで行くわけです。規律化していくわけです。だから、身体を通して心というものは鍛えられていくという感覚ですね。これは、現代の学校教育で言うと「校則」とか「制服」などの決まり事とどこかでつながっていると思われる。校則が生徒管理に使われているから問題となると思います。教育のいわば文化史的な系譜で言いますと、外面、身体をきちんと規律化することが、生徒の内面を作っていくことになる、という教育の文化的な系譜を引いているはずなんですね。それを認識できている先生がどれだけいるのか、それが問題なのかも知りません。

最後に「儒学の人間形成」についてです。江戸時代には藩校ができます。武士が学ぶ学校です。ただ武士が学ぶようになるのは江戸時代の終わりの100年間です。それ前の150年か200年近くの間、勉強した武士は少なかったんです。でも明治維新までの100年間は、武士は本当に勉強しています。藩校では授業料はいりません。廃藩置県が1871年明治4年、その時一斉に藩も藩校もそれで消滅しましたが、明治に入っての4年足らずの間に49校の藩校が出来ました。文明開化の始まる時期にまだ藩校が出来た、合わせますと私の計算では295校でした。藩の数が約300近くありますから、おおむねどの藩にも藩校があったと言えます。

武士たちは何を勉強していたか。それは儒学です。儒学は、藩校で排除された事実は、一例もありません。儒学学習のない藩校は最後までありませんでした。これは驚くべき事実です。儒学だけの藩校がむしろ普通でした。ということは、江戸時代の社会がもう壊れかけている時代に、どうやってそれを切り抜けるのか、危機を克服するために作ったのが学校だったのです。小林虎三郎の「米百俵」を思い出しますね。

それで、儒学はどんな勉強なのか。さっき申し上げたような、中国の古典を素読し読んでいるのですね。危機の時代を乗り切るための人間を育てるための藩校で、実用の世界と程遠い学習です。紀元前の中国古代の漢文を暗記し読む作業ですから。こうした事態をどう解釈すればいいのでしょうか。中身は最も非実用的な学習なのに、儒学は依然として学び続けられたのです。

有名な、長州藩尊王攘夷派の志士達は吉田松陰の塾で学んだ人が多いですね。その松陰は何をやったのか、実はほとんど『孟子』を読んだわけですね。四書のうちの一冊。『孟子』を読んで解釈しているわけです。命をかけて革命でもやろうかという、そんな過激な人たちが、その前の日まで『孟子』を読んでいる。牢獄でもやはり同じでした。『講孟余話』という松陰の著書がありますが、獄中での『孟子』の講義録のような本です。

儒学は「実践知」としての性格を持っています。聖人の言葉、思想の言葉を自ら身体化していると言いました。儒学の発想では例えば、幕府の財政難の理由は人間が悪い、心が乱れているからだと言います。だから儉約して、質実剛健に生きなければいけない。あるいは黒船がやってきて、日本が危なくなった。これを切り抜けるためには、人間の心を鍛えなくてはならないと発想します。でもこれでは、何か精神主義、しかも空虚な精神主義に聞こえますね。

でも必ずしもそうならないのです。儒学による人間形成を、私が「儒教的主体」の形成と捉えます。儒教的主体は、空疎な精神主義なのかといえば、実はそうならないような歯止めがあるのです。儒学、とりわけ朱子学では、「天地自然」と繋がる思想的基盤があるのです。つまり、人間の心のあり方や道徳的主体を根拠づける世界観が背景にあるのです。人は天と地の働きによって生まれ、その天と地の間に人間も含めた万物、命ある生き物があって、それらは天地自然の秩序によって規定されている。人間の生自体、植物や虫や動物たちの命と全部繋がっているわけです。人は、そういう天地の、いわば宇宙の命、「大なる命」のうちにあるのです。超越的な世界、普遍的な世界と言い換えてもいいかも知れません。そうした「大なる命」の一部を人は分け与えられている。その命、その繋がり方についての説明は、理論的に色々構築され、学派が形成されているのです。いわばそうした形而上学や思想性を持った中で、人間主体や人の心の問題が意味づけられているわけです。だから、空疎な精神主義にならない歯止めがかかっていると言えます。

後期水戸学と言われる思想集団がありました。幕末に欧米の外圧の危機に、どう対応してきくの、そこから国体論が生まれ、明治の天皇制国家主義の思想的理論が作られました。それは、国家の意識を、全国の武士たちの心の中に植え付け、そのために命を捧げる志士たちを生み出しました。少なくとも、幕末変革への「点火」の役割を果たしているんですね。空疎な精神主義に見えるけれども、実は人を大きく動かしているわけです。人を動かすだけの、武士の心を「ぐっと」わしづかみにするような、そういう力があつたと言えます。

そう考えていくと、一方で、空疎な精神主義の儒教的な主体と、他方で同時に、彼らはまた、欧米の最先端の知識や技術を積極的に受け入れています。とくに佐久間象山はその典型です。この「儒教的主体」と欧米の「近代知」とは、矛盾しない、共存していくわけです。明治においてもなおある側面で生き続けていきます。明治に現れた近代的学校体制は、もとよりヨーロッパモデルでした。そして儒教的なものは、福沢諭吉らは、古臭い過去の封建思想だから捨てなさい、と言いました。こうした封建的というレッテルを貼って、捨てさるので。近代学問は、儒教的主体を切り捨てることで生まれました。

ここで「儒教的主体」というのは、人の生き方を支え人の価値を重視する価値の基準を、しっかり「身体的にも」内在化・内面化していたわけです。それを切り捨てて大学の実用学化、技術化が一举に進んでいきました。富国強兵にいかに関に役に立ち、近代的な学術をいかに関に作っていくのか、ということに問題を焦点化したのです。

このように儒教が、儒教的ないわば地球的「教養」を切り捨てて、それに代えていかなる価値を持ってきたか、といえば、それは「国家」という価値でした。近代は「国家の時代」です。国民国家をどのように強くしていくのかが共有された最大の課題でした。明治以後の日本は、国民の心を一つにまとめあげて、国家としての一体化をめざしたのです。そのためにひたすら天皇を国民一体化のコアに置いて、天皇中心にした国家主義の道を突き進んでいった。近代化のためにはその政策は大いに成功した。日本は、アジアで唯一近代化に成功した国になりました。しかしその行きつく先は、ご承知の通り太平洋戦争での壊滅でした。戦後は、その国家の価値をほぼ切り捨てて、その代わりに何を置いたか、というと、それは経済の豊かさの価値だったと言えるでしょう。

欧米の大学は、実用的な専門学の知(とくに自然科学)とともに、ギリシャ、ローマ以来の古典学の伝統があります。ラテン語で書かれた古典学の伝統、人文学の伝統があり、それを近代哲学が受け継ぎました。日本でも、エリート達を養成していく旧制高校の教養は何であったかといえば、ヨーロッパ型の教養でした。ひとつは欧米のテキストを読めるように、知的な学問として、ドイツ語や英語やフランス語などの外国語を徹底的に学んでいきました。このレベルは相当高かったようです。他方で、あの「デカンショ節」じゃないですが、デカルト、ショーペンハウエル、カントといった人たちの、ヨーロッパ近代哲学だったわけですね。で、そうした近代哲学は学んでも、日本の儒教的な伝統、——儒教そのものが復活する必要はまったくないのですが——、日本が保持してきた「教養」、つまり「儒教的主体」を養成するような教養の系譜が置き去りにされていきました。

唐木順三などは、そここのところに気づき、大正期から警鐘を鳴らし続けた思想家だと思います。結局、日本の近代の大学、さらに現代の大学は、掘るべき自前の「教養」が欠落しているといえるでしょう。いま、学生がさまざまに問題を起こしている事態を前に、とくに教養部の廃止以後、「教養」が問題化される割に、見るべき成果があるとは思えない深い理由がこうしたところにあると、私は感じています。

その教養とは何かと議論が色々なされますが、江戸時代の側から見れば、日本の大学は自前の教養の学を自ら切り捨て、それに代わる新たな「教養」の構築がなされていない、そう見えてきます。これは、江戸時代の儒教的な教養が良かった、という意味で言っているわけではありません。ただ、人間を根源で支え、人の心を動かしていくような、普遍的な価値が必要ではない、と思っているのです。

そして人にとって何が一番大事か、いわば価値観の基礎を作っていたのは、江戸時代では儒学とその思想でした。そして、それによって支えられて日本の近世、さらには幕末があったわけですが、その部分を欠落させたまま、しかも法人化以後、わが京都大学も含め、今の大学は、ほとんど「実学」主義ですよね。専門職大学院などその表れにほかなりません。教養論が空洞化して、何とかしなきゃいけないという気持ちはみんな持っている。ではどうすればよいのかというところで、議論は生産的には進んでいかないのですね。今、われわれがいるところはそうしたところではないかと思えます。21世紀の、私たちにふさわしい教養は、自前で構築していくしかないと思えます。

時間も来ました。もし質問があれば、付け加えることにいたします。ありがとうございました。

## 【質疑応答】

初めて江戸時代の教育のことをおうかがいしまして、非常に目からうろこであったり刺激になりました。明治

のリーダーたちのことをちょっとお話しされましたけれども、本当にあの、若いんですね。今の若者たちを見ていたら、そんなのできるのかなというぐらいの若さ、20代後半ぐらいで国家を引っ張っていくとか、何か最近NHKでやりましたけれども、三井物産の初代社長が27歳だったとかですね、それはやっぱり江戸時代の教育というのがベースにあったことがあったんでしょうか、そのあたりをちょっとお伺いできればと思います。

## 辻本

どこまでお答えできるか、この種の問いに対しては、これが絶対の正解というのではないわけですが、私の考えるところを申し上げます。江戸時代では、例えば7、8歳の子どもが素読の稽古をします。つまり、聖人の言葉を身につけるわけです。で、トップレベルの研究者も同じものを読んでいると言いました。すると早熟の天才がいくらでも出てくるわけです。例えば山鹿素行などは、10代の半ばで兵学について藩主の前で、講義ができるほどになっています。

つまり、まだ10歳だからこんなこと教えなくていい、という発想は全くありません。もう子どもの時から必要なものは全部教えていくわけです。それが早くできれば、今とは違って早熟な天才が生まれてくる。そういうことを許すシステムです。したがって、20代で国家的なリーダー、あるいは政治的リーダーになるというのは、決して無茶なことではなく、十分ありうることだと思います。

逆に言うと、今のように合理的に、心理的な知見と学問的な段階制でカリキュラムが組まれているのは、天才を抑えて行くシステムだと言い換えてもいいかも知れません。少なくとも江戸時代、個別学習ですから。それが、今個別学習をやろうとすれば、凄く効率が悪いからなかなか難しいですけど、学びのシステムからしても、大いにありうることだと思います。

それともう一つはやっぱり、子どものころからその身分に応じて、「志の持ち方」が徹底的に教えられていきます。漢文の素読なんて面白くないわけですよ。こんな面白くないことを機械的にやらされるのは、みんな嫌ですよね。でも、これをやるということがどんな意味があるかということは、「志」という形で教え込まれるわけです。これは聖人の言葉、価値があること、だからあなたを大きく育てるんだよ、というような言い方、もうちょっとそれは上手に言っていたと思いますが、そうした「立志」を大事にしました。

ですから例えば、いずれ国家を担っていくエリートになる事が期待される人たちは、その志の教育は常に重視されています。ですから、その強い志は、強い責任主体の意識を作るのにつながっていくわけです。良い意味での「誇り」になり、そして自分が学ぶ責任ある者として、早くから主体を形成していくことができる。両方の面で、そういうことが言えるかと思います。

## 海技大学校 田中

大変刺激的なお話、ありがとうございます。海技大学校というところの田中と申します。お話をお聞きしまして、幕末の海外留学生たちの大きな動きのことを思い出させていただきました。それはともかくと致しまして、本日のお話の中で、抑えがちにおっしゃっておられました、教育、それにメディアという点なんですけれども、身体性という言葉と連想いたしました、その学力観ですね、社会学者の学説との連想が働くかと思うんですが、そのあたり先生のお考えをお聞きできればと思ひまして。

## 辻本

もとより、マクルーハン理論などをベースに置いて議論しているつもりでおります。あるいは、アメリカのオングの、「声の文化と文字の文化」という著作も下敷きにしています。文字を獲得した人の思考と、声だけで文字

を持たない人たちの思考の在り方がいかに違うのか、ということも、非常にヒントになっています。メディアに着目してみると、「教育」とはいわないで「知を伝達する」と言い換えた時、メディアの在り方が決定的になる、という発想を背景に持っております。ご指摘の通りでございます。

## 兵庫教育大学 中間

兵庫教育大学の中間と申します。あの、非常に興味深く聴かせていただき、ありがとうございました。最後のところで、教養主体、儒教的主体というところで、ああ、そういう風に考えればいいのか、と。私は自己形成とかの事を研究して、その観点から考えていけそうだなと思っているところなんです。

明治以降に儒教的主体というものが切り捨てられてきた中で、実用的な側面が形成されてきているというお話がありました。その時に、じゃあ何故西洋学問の中で主体を形成出来ていたのだろうか、というときに、先生は、古典学の伝統があって、さらにそれを発展させた形で哲学というものがあって、それを基盤として置いたということをおっしゃられていました。

そこで、今日本の大学生ということ考えた時に、非常に西洋的な言語形態で思考して、主体をどう形成するのかということ課題として提供されている気がしております。で、その時に、そういう西洋的な思考の基盤というものがないうまに、そういう課題を重ねているのではないかと、ということを非常に前々から思っていたのと同時に、学校で習うこととは別に、しつけの面では未だに儒教的な主体みたいなところがこう、じわりじわりと、考え方はいろいろあるかと思うんですけども、土着的な面で形成されてきている何らかの基盤みたいなものと、その西洋的な哲学の伝統の中で形成されてくる教養主体というものは、どういう関係にあるのか、と。

先ほど申し上げた、大学生がキャリアを考えたり、今後の主体をどう形成するのかということ自分の問題として考えてきたときに、その、今おっしゃっていられた教養主体というものの欠如を、先生はどうしたらいいというか、その辺のお考えをお聞かせいただければなと思いました。

## 辻本

ありがとうございます。非常に本質的な問題をご指摘いただいております。私は今日は何も語らなかつたところ。確信をもって私も語る事ができません。私は問題点を指摘しただけです。

つまり、現代の大学が、ヨーロッパ的言語をベースに置き、そして近代の知自体が、哲学も含めて、文字化されている。近代の知は、サイエンスがベースになった知の在り方だろうと思っています。確実なもの、誰もがなるほどその通りだと思う、間違いのない事実やデータをもとにして、それを論理的に組み上げていって、最終的な仮説を証明していくという、その学問の構造は、例えば、日本の古典を研究する、源氏物語の研究者でも、あるいは先端的な科学でも、実は同じ構造を持っている、それが大学の学問です。サイエンスがベースになっているのです。

原爆を作った科学者が、のちに後悔したということも聞いたことがありますけれども、ある意味で価値観の問題を越えた、一つの客観的な、透明性のある知識ということが、近代の、我々大学の人間が依拠している知の在り方だと思います。それに対してヨーロッパでは、それを伝統的な教養、人文学や哲学で補ってきたという風に言いましたが、それともうひとつにキリスト教があります。ただ、今やそのキリスト教と古典学の伝統が欧米でもやせ細っている、特にアメリカにはそれが感じられます。

今やマスメディアの方が、はるかに強力な力を持っています。その前では、ヨーロッパの教養の系譜も危うくなっていると私は思っています。そうした中で、日本は日本の歴史と文化の伝統を持っているわけですから、私は決して伝統主義者ではありませんが、日本がかつてそうやって人間を作ってきた事実は消えないわけで

すね。そしてそういうものに別れを告げて100年ちょっとしか経っていないわけです。文化的なものは100年ぐらいい簡単に消えたり、違うものに移ったりするもんじゃないと私は思っています。ですから、非常に単純化して言えばですね、私たちが自前の哲学、自前の思想、自前の教養主体をいかに構想していくのか、そういうことが今、我々に求められている。

私は、自分自身がそういう課題を背負っていると思っています。その答えは簡単ではありません。そして、それが儒教を復活すれば事足りるという問題では、絶対じゃないわけです。

私なりにもうちょっと言えば、人の個人の命は、実は単独で存在しない。個人の内部に完結しない。宇宙空間の大いなる命、命を生み出した大本があるわけですよ。それは一種の超越的なものであり、「大いなる命」だと私は思っています。私は、そのことを、儒学のベースにもある東アジア全体の「気の思想」から学んだことです。そういう「大いなる命」との繋がり、その中で生かされているという自分の、人間としての自己意識をしっかり見つめなきゃいけない。それは儒教的道徳のベースにはありますが、道徳の面では今の時代に合う道徳をやっぱり考えなきゃいけないですが、その以前に、人間の命なり、あるいは地球や宇宙の根源的なものと自分との関係性、それをどのように語っていくのか、そうした問題を、自分の学問の課題として考えながら、研究しているつもりです。

それをいかに発信するのか。部分的には発信しているつもりですし、今こういう形でも発信もその一部かも知れませんが、ちゃんとした体系性を持ったものにはなっておりません。今言えることはその程度のことです。そういうところを大学は、やっぱり教養論として、もうちょっと専門的な…、いえ、専門知じゃだめだと言ってるんですから、矛盾したおかしな言い方ですよ、ある意味で学問の根っここのところを、もうちょっとお互いの垣根を越えて共有し合って議論していくことが必要だと思うんですよ。

その時に、アジア的なもので私は語りますが、現代の先端的な細胞学なり生命科学なり、あるいはDNAの議論なり、そういうものが意外と繋がっているんです。例えば、「利己的遺伝子」を書いたドーキンス博士でしたか、これと中国の気の思想とが見事に一致するんですよ。ある瞬間、気がついて驚いたことがありますけれども。ですから、決して融合不可能ではないし、そこに新しい可能性があるかなという気はしております。まとめませんけれども、そんなところがあります。

## Office 123 谷

香川県からまいりました、自営業で大学と企業と、就職浪人の方々にかかわる仕事をしております。で、非常に興味深く聞きながら、最後の、気と関連しているというようなお話を、ちょうど私も最近気についての勉強を شدしたところだったので、非常に共感してうかがえました。

で、すごく乱暴に、自分なりに先生のお話を解釈をすると、今もしかすると足りない教育、育てるという意味で足りないのは、音読の部分、声に出すということ、体を使って発するということと、書くという、体を使って何か情報を出していくということ。それと、途中でおっしゃられた、志の教育という部分。この3つが大きく欠けてるのかなあという風に、乱暴ですが解釈というか、学ばせていただきました。そのあたりについて、もう少し先生のお言葉をうかがえたらなあと思いますのでお願いします。

## 辻本

実は今日、時間がないので、走って説明したところがあります。私が一番言いたかったことは、「学びの身体性」というところなんです。別の言い方をすると、現代の学校教育には「学びの身体性」が消えかかっている、ほとんどなくなっている。学校教育の中で、身体の問題は、保健体育、保健は病気からウイルスからいかに身を守

るかという知識だし、体育は鍛えるべき肉体ですよ。それから、理科。つまり自然の一部として、カエルの解剖と人間の構造がほぼパラレルに説明されている。実は命のある人間を丸ごととらえる、その教育は、カリキュラムの中に入ってないと、極端に言えば言えると思うんです。

だから、命の教育なんていって、最近はまだ総合的な学習時間に積極的に取り組んでいく動きがありますが、私は日本でこそ、そういうことは自然に起こってくるんだと思っています。実は「学びの身体性」というのは素読であったり、言いだすと止まらなくなりますが、例えば宇宙空間の大いなる命と自己とが、非常に不離一体なものとして繋がっている。これは、漢方医学で良く言われますけど、呼吸することともものを食べるということ、この二つですよ。呼吸できなくなったら死ぬわけですし、食べられなくなったら死ぬわけですよ。

呼吸というのは、宇宙空間に存在する気と、自分の内部の気が交換している、まさに宇宙の海の中に漂っているわけです。何が言いたいかというと、私の心があり、自分がいる、その自分と宇宙空間との接点の場、これが私の身体だと思っています。だから、朱子学なんかだと、私の身体自体が「一個の小宇宙」だという言い方をします。人間の、もうちょっと言うと、漢方の思想の、足の裏に宇宙がある、なんて言ったりもしますけれども、あんまり近代科学者は信用しないですが、でも、そういう思想は十分有り得るわけです。体が一つの小宇宙になっているというような。何が言いたいかというと、「学びの身体性」ということによって、人間が学ぶと言うことと大自然とが一番繋がる部分が、身体を通しての学びだ、それこそが本当に自分に身についた学びになるということです。「身につく」という言葉は日本人の好みですけど、その言葉通り、身につかない学びはある意味で学びじゃないと言われてたりしますね。「学びの身体性」こそ一番言いたかったことです。とても的確に捉えていただいていると、思いました。ありがとうございます。

最後にちょっと宣伝させて下さい。いま私がたどりついた考えを、一般向けに語る番組が、NHKのラジオ第二放送で10月から3ヶ月間、13回の講座であります。9月末にテキストができます。いま私なりに考えて、一般の市民にメッセージとして発したいという、非常にわかりやすい番組のつもりです。もし耳のはしにでもありましたら、ぜひお聞きいただき、ご批判をいただければありがたいと思います。ありがとうございます。